

佳作

優先席と私

静岡県 不二聖心女子学院高等学校一年 林 星藍

「よかったらどうぞ。」

「私は大丈夫。」

ある大学のオープンキャンパスに行った時、帰りの路線バスの中で聞いた会話でした。その日は激しく雨が降っており、私と母はとりあえず早くバスの中に入りたいたいという一心で、バス停前の大行列に並んでいました。バスが来て乗車したところ、思ったよりも空席がたくさんあり、私たちは座ることができました。

駅に向かうにつれて、バスに乗ってくる人で車内はいっぱいになっていきました。蒸し蒸しする空気の中、私はずっと下を向いていました。座席の横に立っている女性の濡れた傘が気になり、ワンピースにつかないようにと必死でよけていると、隣に座っていた母が急に、

「あ、よかったらどうぞ。」

と言葉を発しました。すぐに、

「私は大丈夫、大丈夫。」

という声が聞こえてきました。顔を上げると私の前に立

っていた、その女性はとても年配の方で少しふらついている様子でした。

私がどうしたらいいのかわからずにいると、母が「立って！」というジェスチャーを送ってきて、私は慌てて席を立ちました。おばあさんは、

「ありがとうございます。」

とにこやかに笑ってくださり、座っていただきました。

さっきまで座っていた自分の席の窓を見ると「優先席」と書いてありました。

「うわ、そういうことか」と、申し訳なさど恥ずかしさで心の中がいっぱいになりました。そうしていると、

「すいません、座らせて下さーい！」

と言いながら、小さい子供とお母さんが進んできました。そして、おばあさんの隣に子どもを座らせました。お母さんは、

「すいません。」

と何度も言いながら子どもを座らせます。その親子は降りる時にも周りにいた人たちに声をかけ、何とかバスから降りていきました。

雨は降り続いていました。私は自分から席を譲ることができなかった申し訳なさ、周りをしっかり見ていて席を譲っていた母との違い、親子のために誰も文句を言わず通路を空けてくれていた乗客の人々のやさしさなどの思いがないまぜになっていました。普段なら、私も電車

やバスの優先席には、どれだけ空いても座らないようにしています。それは幼いころから教えられてきたことと、もう一つの理由があるのです。

子どものころの私は極度の人見知りで、一人で乗り物に乗る時も、空席を探すことすらできませんでした。小学生のある日、塾の帰りの路線バスで、前方では優先席しか空いていなかったため、そこに座ってしまいました。座ってから気づいたもののバスの車内は次第に混んできて、席を移動することもできません。自分がものすごく情けなくなりました。移動することも、席を立つこともできず、罪悪感ばかりが大きくなっていきました。そして、とうとう降車するバス停まで来てしまったという、苦くてつらい思い出があるのです。

今回起きたほんの数分間の出来事は、かつての苦い経験を思い起こさせ、私自身の考えや行動を大きく変える促しとなりました。これから生きていく上での、周りの人に対する思いを大きく変えたといっても過言ではないでしょう。これは、席を譲るという日常生活の近くにある、小さなことだけではなく、しっかりと周りを見ながら行動し、困っている人を助け、支えることにつながり、私自身の生きていく指標になっていくはずです。

近年は子ども、老人、障がいを持つ方など、社会的に弱い立場の人々が傷ついたり、命を失ったりという痛ましい事件が多いように感じます。相模原障害者施設殺傷

事件、福岡五歳児餓死事件など枚挙にいとまがありません。世界に目を向けても、ロシアとウクライナの戦争をはじめ、各地で紛争、衝突が起きています。

そのような中で、雨の日のバスの出来事は日本人のやさしさが垣間見える出来事だったと言えるでしょう。あの日、あのバスに乗り合わせたことは、私にとってとても貴重で、大切な経験となりました。つらさも苦さも含めて、私の成長の糧としていきたい、そう考えています。